

麻布十番のランドマーク『きみちゃん』像

麻布十番商店街の一角に、多目的広場のパティオ十番があります。東京都のモデル商店街の指定を受け、近代化事業のひとつとして、1986年に完成しました。3年後、1989年(平成元年)2月に、きみちゃんの像も誕生します。あれから25年、きみちゃんは色あせることなく、商店街や地域の人々に支えられ、今日も十番を見つめています。このきみちゃん像を手がけた彫刻家の佐々木至さんに、お話を伺いました。



佐々木至(ささき いたる)氏は多摩美術大学、大学院を経て、彫刻家として活躍。現在、東京と長野県野辺山のアトリエで制作活動を続けています。



平成元年当初のきみちゃん像。右足下は募金用の入れ物。現在は箱になっている。

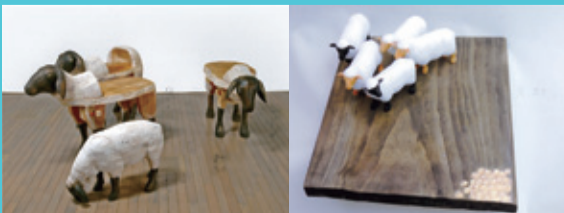


きみちゃんについて

大正11年(1922)野口雨情作詞、本居長世作曲の童謡「赤い靴」が発表され、日本中に知れ渡る。静岡で生まれたきみちゃんは、母親の再婚を機に、アメリカ人の宣教師に養女として引き取られ、渡米の予定だった。「赤い靴はいた女の子、異人さんに連れられて行っちゃった」と噂されたが、アメリカに渡ることはなかった。結核で明治44年(1911)9歳の短い生涯を鳥居坂孤児院で終える。



佐々木さんは石のみならず、木彫の作品も多い。
「彼等の彷徨」(左) 第95回二科展
「羊たちは森に消える」(右)



アートな麻布に魅せられて ②

●きみちゃん像を制作するきっかけについて

はじめは、パティオに記念プレートをつけるためのモニュメントの制作を、という要望を頂きました。3人の共同プロジェクトで10パターンほど企画を出して、アイデアを練っていました。その途中で、誰もが知っている「赤い靴」のモデルがきみちゃんだったこと、異人さんに連れて行かれず、鳥居坂教会の孤児院で、結核のため9歳の生涯を終えたことなどを、商店街の方たちから伺いました。十番と所縁の深いきみちゃんの印象を強く持ったので、私のイメージはきみちゃん像に決まりました。その案で制作が決まり、共同で動いていたメンバー2人からも、1人でやったほうが良いと勧められ、結果私が担当させていただくこととなったのです。

麻布十番商店街の方々とコミュニケーションをとりながら、プランニングの段階からの制作だったので、私自身もとても勉強になりました。

●制作過程について

当時、きみちゃんの像は横浜の港の見える丘公園にも設置されていましたが、見ることは敢えて避けました。自分のイメージを膨らませながら、制作に取りかかりました。子どもの像を彫るので、材料は黒、白などがある御影石の中でも、少し明るい赤御影石を選びました。あの滑らかなタッチにするまでには、少なくとも8工程以上の研磨をしました。顔と足部分はブロンズです。姪っ子がちょうど9歳で、きみちゃんが天国に召されたのと同じ年齢だったので、一部は姪をモデルにしました。

きみちゃんのお母さんは亡くなるまで、娘はアメリカで幸せに暮らしていると信じていらしたそうです。きみちゃんがアメリカへ渡る時は、お母さんとしても一番の晴れ着で送り出すのかな?という思いで、マントをかけてあげました。明治の頃は、マントがおしゃれだったのでは?と思いましたので、あくまでも私の想像の世界ですがね。完成するまでに3ヶ月以上を要しました。

●25年が経過して、改めて作品を見ることはありますか?

はい、時々伺います。今回は3年ぶりです。パティオの木々がすっかり大きくなって、商店街のお店もいろいろ変わっているので、ちょっとびっくりですが、私のきみちゃんは何ひとつ変わることなく佇んでいてくれて、作者冥利に尽きます。変わらない姿を維持して下さっている商店街の皆様や、地域の方々に本当に感謝しています。

子どもたち、家族の幸福を願って、寄付して下さいの方が多く聞いております。ユニセフへの寄付金も1,000万円を超えたとのことで、私の手を離れて25年経ち、ある意味一人歩きしているきみちゃんですが、とても嬉しく思っております。

きみちゃんの顔は丸く、やや上向き加減で未来を見つめているようにも見えます。晴れ着のマントは曙色にちかく、ふっくらとして温かく、足は編上げの靴を履いています。通りがかりの人がきみちゃんの顔をなでたくなるような感じがあります。作家、佐々木さんの温かで穏やかな愛情に包まれているようにも感じます。

私たちは、かつて道路端の石の地蔵に赤い帽子を被せ、前掛けをかけて日々の幸せを願ったりしていた時代がありました。現代彫刻、きみちゃん像は、きみちゃん自らの人生を乗り越えて、石の地蔵の代わりに麻布十番のパティオにあって、行き交う人々を温かく見守っているようです。



麻布びと

未来へ残したい麻布の声



理髪店の2代目を継ぎながら、シネマパラダイスな麻布十番を語る



えんどう ゆきお
遠藤 幸雄 さん



昭和20～30年代、人々の娯楽として映画が大ブームでした。それを反映するかの様に、当時、麻布十番には4つの映画館がありました。「麻布映画劇場」、「麻布中央劇場」、「麻布日活館」、「麻布名画座」。すっかり映画の魅力にとりつかれた遠藤さんは、今でもジャンルを問わず、興味のある映画を鑑賞しています。家業の理髪店が映画を結びつけた、楽しく貴重なお話を伺いました。

長男だから受継いだ理髪店

パティオ麻布十番からほど近く、雑色通りで理髪店を営む遠藤幸雄さん。両親が理髪店を営む麻布坂下町(現・麻布十番2丁目)に生まれた。戦中、疎開のため家族全員、十番を離れることとなる。大空襲に遭い、残念ながら、店ごと全て失った。「こちら一帯、焼け野原で、跡形も残らなかったんですよ」



昭和20年5月 終戦3ヶ月前、焼け野原の麻布十番。東麻布方面から望む。矢印が焼け跡に残った麻布日活の塔部分。

戦後は、被災しなかった白金の親戚宅にお世話になっていた。店の再開を望むお客さんの勧めで、再び十番に家族で戻り、父が今の場所で店を始めた。3兄弟の長男だった遠藤さんは、高校を卒業すると理容学校で学び、いくつかの理髪店での修業時代を経て、父の後を継いだ。



昭和25年1月、店の前で両親、弟たちと。左が遠藤さん(12歳)。

「本当は進学したかったんだけど、ぼくは長男だったからね」と、遠藤さん。



昭和30年、右が麻布中央劇場、左が麻布映画劇場 現在はスーパーが立つ。



昭和30年代、正月興行中の麻布中央劇場。映画全盛期だけに、飾り付けも派手だった。

映画との出会い

戦後の復興と共に、日本映画も全盛期を迎える。昭和33年の統計を見ると、映画館の観客動員数11億3千万人、当時の人口は約9千万人。赤ん坊からお年寄りまで含め、国民全員が月に1回は映画を観ていたという計算になる。



遠藤さんは76歳の現在も、もちろん現役の理髪師である。

「テレビはまだまだ普及していませんでしたから、私に限らず皆よく映画を観ていましたよ」

映画の話になると、遠藤さんの目がキラキラ輝く。十番商店街の中の半径50mという狭い範囲に4軒、少し足を延ばせば魚籃坂下に京映、赤羽橋の先には芝園館もあり、この一帯はまさにシネマパラダイスだったのである。

遠藤さんが父の店を手伝っていた昭和30年代、映画関係者らが散髪に来ていたことが縁となり、店には上映作品のカラフルなポスターが貼られるようになった。

当時の映画は週替わり。上映が終了したポスターの大半は父が古新聞とともに処分していたのだが、「好きな映画やデザインが良く美しいポスターを処分してしまうことが忍びなくて」そんな気持ちから、遠藤さんは気に入ったポスターを保管するようになっていったのだという。



貴重なポスターコレクションを披露して下さいました。

やがて映画黄金期は終焉を迎えることとなる。テレビをはじめ、その他の娯楽の普及と共に、十番周辺の映画館も閉館に追い込まれていった。そして、遂には1つの映画館もなくなってしまったのだが、遠藤さんが保管したポスター72点はいまも手元に残っている。

10年程前、自らが編集を手掛けていた麻布十番商店街の広報紙「十番だより」に、映画に関するエピソードや思い出話を連載。その後集大成として、『麻布十番を湧かせた映画たち』(2010.08発刊/非売品)を出版する。



『麻布十番を湧かせた映画たち』

76歳になる現在、3代目の息子さんも店に立つが、まだまだ現役である。遠藤さんは、昔からの馴染み客の前では鉄を振るい、休みの度に映画を観続けている。映画をこよなく愛する映画フリークでもあり、同時に今となっては大変貴重な品を多数所蔵していることでも有名な遠藤さん。友人の勧めで、72点のポスターと共にテレビ番組にも出演されたほど。たまたま番組を見ていたというコレクターからは、ぜひ譲ってほしいと何度も連絡があったのだとか。しかし、遠藤さんの映画人生を語るうえでなくてはならない宝物、人に譲ることはないという。



TV番組に出演した時に、ポスターの中でも「ローマの休日」「フランケンシュタインの復讐」「宇宙人東京に現わる」は特に価値が高いと評されたという。(『麻布十番を湧かせた映画たち』より転載)

「家業が理髪店だったからこそ、より深い映画との出会いがあったのでしょうね」ただ観るだけでなく、映画そのものを深く追究している本物の映画好きの遠藤さんは、「これからも映画と共に」の人生のようだ。いつまでも、シネマパラダイスな麻布十番を語ってほしいと思う。

※前号「麻布びと」の見出し中、「戦後」の麻布は「戦前」の麻布が正しく、本文中の「ご維新」は「御一新」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

(取材・文/永浜和美、高柳由紀子)

ワタシも麻布っ子

このコーナーでは、あなたの大切な“家族”を紹介していきます。



長い尾がトレードマークのプーちゃん



まちの
人気者の動物を
ご紹介下さい。

六本木交差点から乃木坂に向かう途中、国立新美術館への入口に建つ電気店 日弘社。その店先で往來を見守る色鮮やかなインコのプーちゃんとチビちゃん。大小2つの鳥かごからは、時折元気な啼き声が聞こえ、通り際に足を止める人もちらほら。

お店の方にお話を伺いました。

こちらの2羽、麻布に暮らして何年になりますか？

「大きい方のプーちゃんは4年、チビちゃんは10年です。この子たちは、3代目と5代目です」

お店のマスコットにどうして小鳥を？

「20数年前のある日、六本木交差点の交番に極彩色の立派なインコが迷子として届けられました。戦後間もない頃から、祖父が屋上で鶏を飼っていた我が家に、鳥の扱いに慣れているだろうから、と白羽の矢が立ち、お預かりすることに。折角なので店先で看板娘として、道行く人にも見て頂くことにしたのが始まりです」

鳥かごの前で立ち止まる方も多そうですね。

「先日も以前心研(心臓血管研究所。2年前に乃木坂から西麻布に移転)に通院していらした方が、何年か振りに立ち寄られ、懐かしんでいかれました。毎年定点観測のよ



うに写真を撮っていかれる方もいらしたし、小学生も下校時に声を掛けてくれます」

以前はもう少しにぎやかだったようですが…

「もともと3羽いたのですが、去年母が亡くなった晩に、母の一番かわいがっていた小鳥が後を追うように死んでしまい、以来2羽のままです」

読者の皆さんにメッセージをお願いします。

「前を通られたら、名前を呼んでやってください。爽快な時は啼いて応えますから」

七色の毛並み美人のチビちゃん



(取材・文/出石供子)

写真にエピソードを添え、下記宛てに郵送下さい。飼い主の自薦他薦は問いません。ご応募多数の場合は編集会議に諮りますが、採否の審査過程のお問い合わせには応じかねます。採用させて頂く場合は改めて取材に伺います。お送り頂いた資料は採否に拘わらず返却致しませんので、予めご了承下さい。皆様からのご応募を心よりお待ちしております。

〒106-8515 港区六本木5-16-45

港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当 「ワタシも麻布っ子」応募係

「本気で」やりたい人は大歓迎

今回のテーマは俳優のお仕事です。港区立高陵中学校2年生3名が、劇団俳優座(六本木)の稽古場を訪問、3人の若手俳優の方々にお話を伺いました。俳優になるに至った経緯は三者三様。「金融業界からの転職」、「学生時代からの演劇活動の延長」、「表現する仕事に就きたくて上京した」など、様々でした。

◎俳優になった時、ご家族の反応はいかがでしたか？

—「どうしたの?」「大丈夫?」という感じでした。
—私は、「好きにきなさい」と言われました。
—お父さんは初め反対でしたが、オーディションに受かったら応援してくれるようになりました。

◎仕事の上で嬉しいのはどんな時ですか？

—上演後のカーテンコールで、役を落とし「素の自分」に戻った状態で拍手をいただいている時、すごく嬉しいです。
—私も舞台上に立っている瞬間が一番好き。舞台の上では怒られないし(笑)。
—舞台の上では役になりきるだけで、上下関係がなくなります!

◎俳優を続ける上で気をつけていることは？

髪を勝手に切れない、日やけしてはいけない、ケガをしないようバイクやスキー禁止など色々ありますが、とにかく体調管理です。身体を張った肉体労働者とも言えるので、「丈夫で長持ち」が一番です。のどを守るために加湿器に加え、マスクの下にもう1枚濡らせたマスクをしたり、辛い食べ物や炭酸飲料を避けるなどしています。

◎長いセリフはどうやって覚えるのですか？

状況がわかっていけばセリフは出てきます。覚えなるといけないとなったら覚えられます。台本をひたすら読む、書く、聞く、…いろんなやり方があるけど、覚えること自体は比較的簡単です。難しいのはその先です。



メモや書き込み、付箋など、かなり使い込まれている様子の台本。

◎他の人にもこの仕事をすすめますか？

(3人そろって)すすめません!(笑)自分の意志でやらないと途中で大変です。配役されないと仕事がないんですよ。でも本気でやりたい人は大歓迎です。

◎俳優になりたいと思っている人にアドバイスをください。

今ムダだと思っていることでも、いろんな人間を演じるお芝居では何でも役づくりにつながるという喜びがあります。とにかく今やっていることを楽しんで!力仕事の面も大きいから、身体は鍛えておいた方がいいですよ。



頂いた次回の地方公演のパンフレットを手に、俳優座劇場の前で。

(取材・文/荒川佳耶、奥野真依、小林ユキナ 取材サポート/大村公美子)

劇団俳優座
小林亜美さん(後列)
齋藤奈々江さん(前列右)
森根三和さん(前列左)

インタビュー中の姿がおさげ髪でモンペ姿なのは、戦時中の女学生役のためです。



子どもに生きていく力を

KIDS! ハローワーク

親子で
読んでみよう



舞台の立稽古の合い間、時間を頂き取材しました。矢継ぎ早の質問に、笑顔でお答えくださいました。



ウルグアイ東方共和国
 面積: 17万6,215平方キロメートル(日本の約半分)
 人口: 338万人(2012年、ウルグアイ大使館ホームページより)
 首都: モンテビデオ(約140万人)
 民族: 欧州系90%、欧州系と先住民の混血8%、アフリカ系2%
 言語: スペイン語
 宗教: 国教なし。国民はカトリック56%、無宗教38%、プロテスタント2%、ユダヤ教2%
 政体: 大統領制度の立憲共和制
 元首: ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ大統領
 議会: 二院制(上院31名、下院99名、共に任期5年、上院議長は副大統領が兼任)

外務省ホームページ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uruguay/data.html>より

ウルグアイ東方共和国

エドゥアルド・ブズー(EDUARDO BOUZOUT)特命全権大使 取材協力/ウルグアイ大使館

大使を訪ねて 23
 麻布の"世界"から



第一回FIFAワールドカップの決勝戦の会場、「センテナリオ・スタジアム」。(大使館提供)

Uruguay

日本から最も遠い国。

ラテンの明るさと情熱をそなえた国民性



首都モンテビデオの東138kmに位置するリゾート都市「プンタ・デル・エステ」。美しいビーチリゾートとして、アルゼンチンやブラジルなどからも観光客が訪れる。(大使館提供)



カーニバルの間は町中に太鼓の音と踊りがあふれ、芸術祭も行われる。(大使館提供)

南アメリカ大陸東南、大西洋に面し、ブラジルとアルゼンチンの間に位置するウルグアイ。日本との移動は乗り継ぎ2回、約30時間かかる遠方の国だ。西麻布のビルの一室にある大使館にて、エドゥアルド・ブズー(EDUARDO BOUZOUT)特命全権大使に、ウルグアイはどのようなお国柄か、日本との関わり合い、そして大使の日常についてインタビューさせていただいた。

年々強化される、日本との経済関係

ブズー氏はウルグアイ共和国大学卒業、法学部博士課程をおさめた後、ウルグアイ労働大学の教員、教授を経て、1985年外務省に入省。駐エクアドル、駐カナダ大使館勤務の後、2012年7月より駐日大使として赴任された。写真のとおり、実に爽やかなルックスの方。終始、にこやかに質問に答えてくださった。

ウルグアイと日本の外交の樹立は1921年9月。現在では経済協力を中心として友好関係を維持。近年では自動車部品や日本米の生産など、様々な分野で日本企業の進出が活発になってきているという。主要産業は農牧業で、牛肉、羊毛、ワイン等をヨーロッパをはじめ世界各国に輸出。ウルグアイで生産された日本米は、日系人の多い隣国のブラジルにも輸出されている。また、生鮮牛肉についてはまだ日本には輸出されていない。しかしながら一昨年の東日本大震災の折には、ウルグアイ政府から被災地へ、

義援金、ジュース、水の他に、コンビーフ4,600缶(約2トンの)物資支援をいただいている。

ウルグアイと日本の国民的な気質の相違点については、「日本人はとて礼儀正しい。駅などでは誰もが整然と並びますね。仕事においてもひと度始めると最後まで完璧にやり遂げ、非常に真面目な性格だと感じます」と、多分にお褒めの言葉をいただいた。一方ウルグアイ人は、「ラテンアメリカ特有の陽気で社交的、寛容な性格」とのこと。なるほど、大使の明るく豪快な笑い声は、いかにもラテン的だ。そんなウルグアイの人たちの最大の楽しみは、毎年1月末から(現地では夏)、首都モンテビデオを中心に催されるカーニバル。40日以上というその期間は、カーニバルの長さとして世界で最長なのだそうです。

大使はまた、日本には在日ウルグアイ人が少なく、地理的にも本国と離れているという事情で実現していないが、「著名な芸術家や歌手を呼んでウルグアイの文化を広く紹介することを、今後の活動のファーストステップにしたいですね」と語られた。

世界的サッカーの強豪。その強さの秘訣は？

ウルグアイといえばサッカーを思い浮かべる人も多いことだろう。サッカーにおけるウルグアイの戦歴には赫赫たるものがある。建国100周年を祝った1930年に第1回FIFAワールドカップの開催地となり、優勝国でもある。1950年の第4回大会においては、決勝戦で開催国の強豪ブラジルを破って優勝。後半の2ゴールで逆転勝利を取めたこの試合は「マラカナッソ」と呼ばれ、今でも語り継がれる伝説となっている。

後に南米予選や本戦で低迷する時期もあったが、2010年の南アフリカ大会でベスト4に入るなど、強豪国としての復活を果たしている。「代表選手の9割がヨーロッパリーグで活躍しています。非常にストイックな環境で経験を積んでいます」。あらためてその強さの秘訣がどこにあるかを尋ねてみると、「それはウルグアイ人の“DNA”ですかね」とユーモアをこめて答えてくださった。その笑顔の内側に、自国サッカーへの“誇り”を感じた。

ウルグアイ産のワインは、肉料理にあう赤がとくに美味しい。フランスから持ち込まれたタナ種で、力強くしっかりとしたボディ。日本でも販売している。



ウルグアイ人が日々楽しむ「マテ茶」。ひょうたんや木、牛角の中をくりぬいた容器に茶葉を入れお湯を注ぎ、濾し器の付いた金属製のストロー、「ボンビージャ」で飲む。友人間で回し飲みして親近感を高めるのが習慣。



この8月には、日本代表との国際親善試合が宮城スタジアムで行われる。熱い戦いを期待したい。

親日派の夫人と日本文化を楽しむ

さて、来日して1年ほどの現在は、日本で見るもの体験するものが、実に新鮮だという。ご夫妻での来日だが、夫人が大の日本びいき。ティーンエイジャーの時に、親族の方が日本で仕事をしている関係で来日。半年のつもりがたいそう気に入って2年ほどの滞在となり、今回の日本駐在もとても楽しみにされていたそうだ。茶道のお稽古に通う夫人とともに、大使も「お茶会」に参加。「茶道は道具をそろえるのが大変ですね」とニコリ。また、相撲を見学したり、この春には大使館近隣でお花見も堪能された。カーニバルの盛大な国から来た大使に、六本木ヒルズでは8月ににぎやかな盆踊り大会がありますよ、とお伝えしたところ、興味津々。この夏は、ご近所で、浴衣姿の大使とすれ違えるかもしれない。



お土産として人気の陶器製の置物。さまざまなフクロウの表情がユーモラス。

ウルグアイはアルゼンチンと並び「タンゴ」の国でもある。世界で最も演奏されているといわれる「ラ・クンパルシータ」はウルグアイ人作曲家によるもの。(大使館提供)



17世紀からの植民地時代の街並みを保存した「コロニア・デル・サクラメント」は、ユネスコの文化遺産に登録されている。(写真/三上裕規)

麻布 未来写真館

（麻布十番商店街の変遷）



昭和48年(1973年)当時、商店街には歩道に沿ってアーケードがありました。写真提供: 桜井昭一さん



平成24年(2012年)現在ではアーケードは姿を消し、車道には石畳が敷かれています。



昭和42年(1967年) 写真撮影: 田口政典さん 写真提供: 田口重久さん



昭和48年(1973年) 写真提供: 桜井昭一さん



平成24年(2012年)

比べて見ると...

昭和42年の写真では、信号機の形も、商店街のアーケードの造りも違います。(写真右) 銀行の建物はまだありません。

わずか6年間で原風景を残しつつも、大きく変化している様子がうかがえます。

比べて見ると...

それから39年後の現在(2012年)では地下鉄の入口があり、その後ろにはマンションが建ち、商店街のアーケードも姿を消しています。

それでも当時の面影をどことなく偲ばせています。地域の人々の心意気でしょうか、“温故知新”を感じることができるまちなみです。

「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、平成21年度から区民や企業等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取組として「麻布未来写真館」事業を運営しています。

当事業は、麻布地区の資料収集・保存していくことを通じて、麻布地区に暮らす人々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承するとともに、より一層の活用を目的としています。

同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの皆様に知っていただき、麻布地区への愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています。

未来に向けて、残し、伝えていべきとお感じになる「麻布地区の古い写真」がありましたら、どのようなものでもかまいませんので、港区麻布地区総合支所までお寄せください。事業に関すること、新規メンバー募集も含め、「協働推進課地区政策担当」までお問合せください。 **お問合せ 電話:03-5114-8812**

(取材・文/田中康寛)

地域社会のゆくえ

11

「思いやり」で人もペットも幸せな地域づくりを その①

飼っている人も飼っていない人も

麻布地域を歩いていると、散歩している犬をよくみかけます。最近は一匹の飼い主さんが2頭、3頭と連れていることも増えたようです。動物が好きなお人々にとってはほほえましい光景ですが、一方でトラブルもあるようです。みなと保健所 生活衛生相談係の生駒憲一さんにお話を伺いました。

港区のペットの飼育状況は

港区で登録されている犬の数は年々増えていて約9,000頭(麻布地区では約2,400頭)ですが、実際にはその2倍が飼育されていると、消費されているペットフードの量からペットフード工業会が推測しています。狂犬病予防法により犬は登録が義務付けられています。狂犬病は治療法が確立されておらず、人間がかかると非常に危険なため、飼っている犬に必ず予防接種を実施していただきたいと思ひます。

猫は登録義務がないため、区では飼育数を把握していません。

平成25年度
狂犬病予防注射済
東京都 港区
第ウ00000号

狂犬病予防注射済のタグ(左)と犬の鑑札(右)。犬を飼っている方、こちらはお持ちですか？



ペットに関するトラブル

ふん尿の始末と臭い、犬の放し飼い・鳴き声についての苦情が苦情件数の上位に並んでいます。

軽犯罪法では「公共の利益に反してみだりにごみ、鳥獣の死体その他の汚物又は廃物を棄てた者」を、拘留または科料に処すと定めています。

港区では家でトイレを済ませてから散歩することを原則として啓発しています。20kmに約23万人が住んでいる港区の地域特性から「みんなが気持ちよく暮らす」ことを考えると、ぜひご協力いただきたいと思ひます。猫については地域猫への不適切な餌やりなどへの苦情が多いのですが、「地域猫対策」を掲げて去勢・不妊手術への助成金支給や適切な餌やりルールを推し進めたことで、ここ5年ほどで地域猫の数が減り、トラブルも減りました。全



2013年3月10日にみなと保健所で開催した「港区まちの猫セミナー」の様子。犬のしつけ教室なども随時開催しています。



みなと保健所発行の犬のマナーブックやパスポート(左側)とマナー啓発のプレート(右側)は希望者に配布しています。

体の苦情相談件数(麻布地区)も2008年の258件から2011年には78件まで減ってきています。

ペットを飼うにあたっては

ご自分のライフスタイルが変わっても約20年間、最期まで面倒をみる強い覚悟をもって飼ってあげてください。それから災害に備えてペットの避難グッズも準備しましょう。避難所ではペットを受け入れる前提ですが、ペットのための備蓄はありません。3~5日分の食糧やトイレ、居場所を確保するためケージを準備しましょう。

※避難所によってペットの受け入れ態勢は異なります(東町小地区防災協議会会長大塚さん談)ので確認しておくといざというときに安心です。

ペットがいることで心が癒されたり、ペットを通してのコミュニケーションが生まれたり良いこともたくさんあります。好きな人も苦手な人も、みんなが気持ちよく暮らせるよう配慮をお願いしたいと思ひます。ペットを飼っていない人にも地域の課題として関心をもっていただけると幸いです。

※ペットに関するご相談は麻布地区総合支所協働推進係まで(電話:03-5114-8802)。港区HP (<http://www.city.minato.tokyo.jp/>)にもよくある質問など掲載されています。

(取材・文/満木葉子)

200年続いた鎖国政策は、幕末期に相次いで日本を訪れた西欧諸国の開国要求によって終焉を迎え、江戸にはアメリカ、イギリスなどの公館が開設された。その後も日本との交易を求めて次々と来日する各国の使節団のために、徳川幕府は赤羽接遇所を建設した。接遇所は、江戸に上陸した異邦人達の宿泊所であり、同時に外交交渉の舞台でもあった。残されている貴重な歴史資料をもとに、赤羽接遇所について紹介したい。



『赤羽付近の町並み』画：アルベルト・ベルク(『オイレンブルク日本遠征記』付図 港区立港郷土資料館蔵)

赤羽接遇所は、安政6年6月(1859年8月)、芝赤羽の講武所調練場の跡地に建設された。増上寺の別院などに囲まれた2860坪に及ぶ敷地は、大名屋敷並みの広さだったという。外国人の宿泊・応接用施設のほか、詰所、厩、番所などがあり、幕府の役人が異人の監視と警護の役を担った。

赤羽接遇所の初めてのゲストは、当時、欧州の新興国として国勢を拡大していたプロイセン王国の外交使節団、オイレンブルク伯爵一行だった。海軍を伴って東アジア遠征の途にあったオイレンブルク使節団は、プロイセン及びハンザ同盟諸国と日本との交易を求め、万延元年7月(1860年9月)に江戸湾に来航した。

礼砲が轟く中、田町に上陸した一行は総勢250人、軍楽隊、武装水兵を伴っておよそ1キロの一本道を行進し、赤羽接遇所に入った。使節団はこの日から日普修好通商条約が締結されるまで、半年間に渡ってここに滞在した。江戸湾に投錨したアルコーナ号など軍艦の乗組員も交代で上陸して接遇所に宿泊している。

使節団の日記や手紙によると、黒の板塀に囲まれた建物の東側には、重い瓦を屋根に頂く巨大な角材で組み立てられた大きな門があり、庭には玉砂利が敷き詰められていたという。

一行が宿泊していた建物には、玄関を左側に、その先の長く長い廊下の左右に2間続きの居室が何列も続き、炊事場や浴室も備えられていた。応接室や居室の庭に面した側は、ぐるりと縁側に囲まれ、異邦人はそれを「屋根のあるベランダ」と記している。また、部屋を仕切る襖や障子は「紙製で、横に滑らせて開閉し、部屋を大きく使う時は取り外せばよい」と、その機能性に驚嘆した様子が伺える。家具はきわめて少なく、畳が敷かれ、机と椅子、粗末なベッドがあるのみで、その他必要なものは船から持ち込まれた。玄関の右手には短い廊下があり、幕府役人の施設に繋がっていた。当時としては標準的な武家屋敷も、異邦人の目には「いささかテントのよう」に映ったようだが、「全体の印象は非常によく、部屋も明るく風通しのいい快適なもの」と評価している。



赤羽接遇所でプロイセンドイツ国旗掲揚(1860年9月8日)、『プロイセン・ドイツが観た幕末日本—オイレンブルク遠征団が残した版画・素描・写真』(OAGドイツ東洋文化研究協会蔵)

人居初日の食事は、幕府から魚を主菜としたお膳が供されたが、特に生鮭の刺身とデザート

の砂糖菓子は彼らの舌を満足させたようだ。その後は、野菜果物、魚、家禽(鴨、鶏、雉)は出入り商人から、肉類は横浜の業者から調達し、随同行のコックが欧風料理を作ったと記録にある。

接遇所には、食料品や生活用品を売る御用商人のほかに、さまざまな品を持ち込む物売りが出入りし、午前中はさながらバザールのようだった。入居から

暫く経つと、互いの言葉も理解し合えるようになり、物売りは異人達の好みに応じた品を持ち込むまでになったという。

プロイセン国王から将軍への献上品のひとつにシーメンス社製の電磁式電信機があった。使い方を学ぶために、2人の侍が接遇所に招かれている。秀才の誉れ高い福井藩士 市川兼恭は、電信機の取り扱いを習熟しただけでなくドイツ語も会得し、翌年の1862年には、わが国最初のドイツ語辞書となる「独逸単語編」を編纂している。

一行は滞在中に接遇所でクリスマスを盛大に祝った。応接室も草木で装飾され、オイレンブルク伯爵の発案で、もみの木が用意され、みかんや梨、椿の花や砂糖菓子を吊るし、日本の提灯を燈してツリーを飾った。これが日本初のクリスマスツリーとされているが、これには諸説もあるようだ。



日普修好通商条約調印(1861年1月24日)。柱にクリスマス飾りの名残が見られる。画：ヴィルヘルム・ハイネ。『プロイセン・ドイツが観た幕末日本—オイレンブルク遠征団が残した版画・素描・写真』(OAGドイツ東洋文化研究協会蔵)

プロイセンに続く2番目のゲストは、西洋医学など当時の最新の学問を日本に伝えたシーボルトだった。晩年、オランダ貿易会社の商務官として再来日し長崎に滞在していたシーボルトは、幕府顧問として江戸に招かれ、文久元年5月(1861年6月)から同年10月(11月)まで5ヶ月にわたって息子と共にここに滞在している。当時10代の若者だった息子のアレクサンダーは、父の帰国後も日本に留まり、江戸末期から明治の半ばにかけて数々の外交交渉に通訳として立ち会うことになる。また、「オランダおいね」として知られるシーボルトの娘が、晩年麻布界隈に暮らしたというのも興味深い史実である。

接遇所は帝政ロシアとの領土交渉の舞台でもあった。安政元年12月(1855年2月)に結ばれた日露和親条約で、ロシアは下田、函館、長崎への寄港が許されたが、文久元年1月(1861年3月)になって、突然、日本海と東シナ海を結ぶ要衝の対馬にポサドニック号を派遣、島の一部を占拠した。島では略奪や衝突など様々な事件が続出し、対応に苦慮した幕府は、ロシア南下を阻止したいイギリスを後ろ盾にしてロシアとの外交交渉に臨んだ。1861年7月、在函館領事ゴスケヴィッチが江戸に来訪、函館奉行 村垣範正と赤羽接遇所で数日間にわたる交渉を行った。その結果、ロシアはようやく対馬からの撤退に合意し、同年9月ポサドニック号は対馬より退去した。

このように日本に来訪した外国人の接遇や外交交渉の場として活用された赤羽接遇所だったが、その後、各国が独自に公使館を設置したこともあり、外国人用の宿泊施設としての存在意義を次第に失っていった。いつ施設が閉じられ、建物が取り壊されたのかを知る記録は、今回残念ながら見つけることはできなかった。かつての外交交渉の舞台であり、江戸庶民が異邦人と交流できる貴重な場でもあった赤羽接遇所の跡地は、現在 飯倉公園となっており、ここに接遇所があったことを示す1枚の看板が立つのみである。



飯倉公園に立つ看板

麻布の軌跡

赤羽外国人接遇所

『赤羽根外国人旅宿所絵図』(東京大学史料編纂所蔵)



『芝愛宕下絵図』(国際日本文化研究センター蔵)。丸印が赤羽外国人接遇所。

参考文献/『オイレンブルク日本遠征記 上・下』中井昌夫著 雄松堂

『明治初期の日本 ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より』

ペーター・パンツァー、スヴェン・サーラ著 OAGドイツ東洋文化研究協会

『プロイセン・ドイツが観た幕末日本—オイレンブルク遠征団が残した版画・素描・写真』セバステアーン・ドブソン、スヴェン・サーラ編 OAGドイツ東洋文化研究協会

『シーボルト日記 再来日時の幕末見聞記』石山禎一・牧幸一訳

八坂書房

『ロシア人の見た幕末日本』伊藤一哉著 吉川弘文館

『江戸の海外情報ネットワーク』岩下哲典著 吉川弘文館

『江戸の外国公使館』 港区立港郷土資料館

取材協力/新藤真理さん(駐日ドイツ連邦共和国大使館)

松本知子さん(OAGドイツ東洋文化研究協会)

マイケ・ロエダさん(OAGドイツ東洋文化研究協会)

前号に引き続き今回は、麻布地区総合支所が独自に実施する12の地域事業のうち、「国際協働事業」「飯倉片町地下横断歩道小学生児童絵画展示事業」「『麻布の絆』活性化事業」の3事業をご紹介します。

7.国際協働事業

【事業化に至った課題認識】

麻布には多くの大使館があり、外国人の区民や来街者が多く増えています。日本人と外国人とのコミュニケーションの機会を増やし、信頼関係を深め、地域に対する愛着を深めてもらうようにします。

【事業の内容】

港区に住み、または活動する外国人に、麻布地区をより知ってもらい、地域情報を共有していくとともに、地域の人たちと行う防災講習会を開催します。また、麻布地区のボランティア活動(環境美化活動・パトロール等)の紹介と参加の呼びかけや、総合支所発行物の外国語への翻訳と頒布の取組を進め、地域への愛着を深めてもらいます。



全体計画目標 (26年度末)	現 状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
地域のボランティア活動などへの参加、発行物・イベント情報の翻訳の充実・実施 防災講習会・交流会の開催	地域のボランティア活動などへの参加、発行物の翻訳の充実・実施	充実 ・実施 ・開催	充実 ・実施 ・開催	充実 ・実施 ・開催	充実 ・実施 ・開催

8.飯倉片町地下横断歩道小学生児童絵画展示事業

【事業化に至った課題認識】

昨今、小学生の通学途中をねらった犯罪や事件が発生し、通学路の安全確保が課題となっています。

地区内にある飯倉片町地下横断歩道は小学校の通学路ですが、地下にあるため閉鎖的な空間となっており、防犯面で不安があります。そこでこの場所を、地域の人びとが立ち寄り「小学校と地域の人びとをつなぐコミュニティの場」に変える工夫を行うことにより、地域の皆さんにとって親しみが持て、地域の目が行き届く安全な通学路とし、麻布の「地域力」を高めます。

【事業の内容】

小学校の通学路となっている、公共空間である地下横断歩道を利用して小学生の絵画を展示します。地域の小学生が制作した絵画をとおりして地域のコミュニティの場を提供するとともに、公共空間の見守りや多様な人びとの連帯感を高めます。

全体計画目標 (26年度末)	現 状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
1か所 絵画の付替え	絵画の付替え	1か所 絵画の 付替え	1か所 絵画の 付替え	1か所 絵画の 付替え	1か所 絵画の 付替え



9.「麻布の絆」活性化事業

【事業化に至った課題認識】

自前の事務所や活動拠点を持たない町会等の地域団体は、その活動が制約されがちです。また、様々な活動においては、人と人とのつながりが、活動の活性化の基盤となります。地域コミュニティ活動の活性化と継続化を図るとともに、団体同士の交流も促すことで、地域全体のコミュニティ力を高めていきます。

【事業の内容】

地域コミュニティや地域活動の将来を支える小学生とその保護者を対象に、防災、環境美化等の地域活動体験の機会を設けます。

また、地域コミュニティや地域活動の連帯感を高めるため、小学生を対象に、地域への関心や愛着を表現したシンボルマークを募集し、地域活動に活用していくことで、地域の人々とのつながりを強化します。

全体計画目標 (26年度末)	現 状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
実施	—	実施	実施	実施	実施



麻布アートフェスタにおいて「麻布の絆賞」を受賞した「あざぶの守り信号君」

麻布消防少年団が団員募集中



平成25年4月21日(日)麻布消防署において「麻布消防少年団入団卒団進級式」が行われました。

12人の新入団員の代表が「勇気と責任を持って行動します。」と入団宣誓を行うと会場から大きな拍手がわきました。

活動成果の発表として、中学生が三角巾による止血法を、小学6年生はロープワークを行いました。

今年度も防災キャンプや出初式見学など楽しい活動を計画しています。小学1年生から中学3年生まで入れますので、入団を希望される方は麻布消防署までお問合せください。

担当/麻布消防署警防課 長谷川 電話/03-3470-0119



港区麻布地区 総合支所だより

港区麻布十番暫定自転車等駐車が 平成25年5月にオープンしました

港区麻布十番暫定自転車等駐車が平成25年5月にオープンしました。ぜひご利用ください。

なお、自転車等駐車の開設に併せて、放置禁止区域を設定いたします。放置禁止区域内に放置されている自転車は即時撤去の対象となります。自転車は、手軽で安全な乗り物ですが、歩道に放置されていると歩行者の安全な通行の障害となり、怪我や事故に繋がる危険性があります。また、災害時には避難・救助活動の妨げにもなります。麻布十番地域の放置自転車をなくし、安全・安心で快適な歩行環境を目指しています。ご理解、ご協力をお願いいたします。

名称	収容台数	利用方法	利用料金	利用時間
第1暫定自転車駐車場(歩道上)	自転車のみ 268台	一時利用 ①③⑤⑥⑦	一時利用 最初の2時間無料、 6時間毎100円	24時間
		定期利用 ②③④⑤⑧⑨	定期利用 一般：1,800円/月、 学生：1,300円/月	
第2暫定自転車等駐車場	2階 自転車 84台 1階 原付バイク 30台	自転車 一時利用/定期利用 原付バイク 一時利用	一時利用 最初の2時間無料、 8時間毎100円 定期利用 一般：1,800円/月、 学生：1,300円/月 原付バイク	24時間

※第2暫定自転車等駐車の原付バイク用駐車の開設は、平成26年4月1日から予定しています。



お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課まちづくり推進担当
電話／03-5114-8802

子育て座談会 ～みんなの子育てはどう？～

育児でお困りのことについて、参加者と講師が気軽に話しながら、みんなでほっとできる座談会です。



対象／麻布地区在住の3歳までの親子

①	日時	平成25年7月23日(火)午後1時30分～3時
	テーマ	「食事のしつけ」
	申込み	電話で平成25年7月1日(月)から7月16日(火)までに下記問合せ先へ
②	日時	平成25年9月24日(火)午後1時30分～3時
	テーマ	「子どもの叱りかた」
	申込み	電話で平成25年9月2日(月)から9月13日(金)までに下記問合せ先へ
①②共通	場所	麻布区民センター(住所/港区六本木5-16-45)
	募集人数	10組(先着順)*保育あり
	講師	NHKラジオ「子どもの心相談」アドバイザー 内田 良子 先生
	費用	無料

お問合せ／麻布地区総合支所区民課保健福祉係保健師
電話／03-5114-8822

「みんなと安全・安心コミュニティプロジェクト」調査結果報告書がまとまりました

麻布地区総合支所では、平成24年度から地区の課題分析や対応策を検討する地域事業「みんなと安全安心コミュニティプロジェクト」を実施しています。

平成24年度は、無作為抽出した麻布地区管内の区民等を対象に2つの意識調査を実施しました。1つ目は、六本木地区の安全安心(治安)や体感治安、地域活動の課題や今後の取組等について調査しました。2つ目は、地域の課題や町会・自治会等による地域活動等について調査しました。調査結果等詳しくは、報告書をご覧ください。

報告書の内容は、麻布地区総合支所協働推進課窓口で閲覧できるほか、区のホームページ <http://www.city.minato.tokyo.jp/azabukyoudou/20130423> からご覧になれます。



安全安心なまちを目指して ～「(仮称)六本木安全安心憲章」の制定に向けて取り組んでいます～

都内有数の繁華街を抱える六本木地区では、安全で安心なまちを実現していくため、六本木地区安全安心まちづくり推進会議をはじめ、麻布地区の生活安全と環境を守る協議会や自発的な地域活動など、区民、事業者、関係機関、行政等が連携・協働した取組を進めています。

こうした中で、より実効性のある方策を検討するため、上記六本木地区の意識調査結果等も踏まえ、平成25年3月26日に開催された六本木地区安全安心まちづくり推進会議において、安全安心なまちを目指していくための推進策の旗印となる六本木地区の独自ルール「(仮称)六本木安全安心憲章」を制定する方針を決定しました。

現在、同推進会議分科会で同ルールの制定及び具体的な推進策の検討を進めています。

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話／03-5114-8802

ザ・AZABUへのご意見・ご要望をお寄せください



ご住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課へ。
●電話／03-5114-8802 ●FAX／03-3583-3782

地域情報紙

「ザ・AZABU」はホームページからもご覧になれます。



ザ・AZABU

●配布設置場所のご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番の各地下鉄の駅、ちいばす事内、みなと図書館、麻布図書サービスセンター、南麻布・本村・麻布・西麻布・飯倉の各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Chief 田中亜紀
Sub Chief 高柳由紀子
Staff 出石供子 永浜和美
大村久美子 満木葉子
尾崎恭彦 森 明
折戸桂子 山下良蔵
田中康寛
Junior Staff 荒川佳耶 小林ユキナ
奥野真依

編集後記

この号から編集長をお受けしました。2006年の創刊以来、自他ともに認める「麻布好き♡」な人たちが、独自の視点でテーマを見つけ、協力しあいながらオリジナルのページを作ってきました。これからもアンテナ高く、様々な情報をキャッチアップしていきます。活動に興味のある方、ぜひ一度、編集会議を見学しに来て下さい！新しくスタートした「ワタシも麻布っ子」でも、皆様からの投稿をお待ちしております。
(田中亜紀)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします!

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休/午前7:00～午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話／03-5472-3710 FAX／03-5777-8752
Eメール／info@minato.call-center.jp

“Minato Call” information service
Minato call is a new city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752; E-mail: info@minato.call-center.jp